



TITLE:

外科學教室ノ行歩ニ就テ

AUTHOR(S):

鳥潟, 隆三

CITATION:

鳥潟, 隆三. 外科學教室ノ行歩ニ就テ. 日本外科宝函 1930, 7(appendix): 694-696

ISSUE DATE:

1930-12-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/200577>

RIGHT:

外科學教室ノ行歩ニ就テ

鳥 潟 隆 三

Fortschritte in der Chirurgischen Universitätsklinik Kyoto

Von

Prof. Dr. R. Torikata.

吾々ノ外科學教室ハ猪子、伊藤兩教授ニヨリテ創メテ開カレ、今日マデ外科學及ビ醫學ノ一般ノ進歩ニ隨テ進ンデ來マシタガ、其間ニモ亦タ外科教室トシテノ固有ノ歩ミ方ヲモ示シテ居リマス。其ノ極メテ小ナルモノハ手ノ消毒ノ仕方デ、數年來カラ單ニ木綿片ト石鹼ダケデ何等ノ不都合モナイバカリカ却テ輕便ナ方法デアルトヲ認メシメルニ至ツテ居リマス。

腹水ノ治療方法ノ研究ニ關聯シテ現ハレタモノノーツガ腎大網膜挿埋法デアリマスガ、臨床例ハマダ尠イデス。教室トシテハ肝硬變慢性腎炎等機會アル毎ニ之ヲ行ヒ其他ノ手術方法ト比較スルコトが必要デアラウト考ヘマス。

外鼠蹊ヘルニアノ手術方法モ餘程以前カラコッヘル氏法ヤバッシーニー氏法ヲ棄テ固有ノ方法(波多腰法1918年)ヲ採用シテ居リマスガ、コレハ相當ニ例症が多クナツタ様デアリマス。今後モ引續キ之ヲ行ツテヨイモノト考ヘラレマス。

眞正癰瘤ニ對シコッヘル氏手術ヲ施スコトノ可否ハ今暫ク論セズ。併シ之ヲ行フナラバ左右何レカノ一方ダケデナク左右對稱性ニ之ヲ行ツタ方が手術ヲ行フ理論ニヨリヨク適合スルト言フ立場カラ原則的ニ之ヲスル様ニシテ居リマスガ、一定ノ數ニ達シタナラバ結果ヲ通覽スル必要ガアルト思ヒマス。

胃ノ切除ニハ種々ナ方法ガ試ミラレ、其中ニハ十二指腸水平部ヲ剝離シテコッヘル氏法ヲ行フコトヲコッヘル II トシテ行ツタコトモアリマシタ(故伊藤名譽教授)ガコレハ併シ其後行ハレナクナリマシタ。近年ヤリ出シタ法式(大澤・青柳)ハ當分ノ間行フガヨカラウト思ヒマス。其内一ハ胃内消化ガモスコシ長ク行ハレ得ル様ナ方法ヲ加味スル方ガヨイカモ知レマセヌ。何レニシテモソレゾレ相當ノ例數ヲ集メテ系統的ニ研究セネバナリマスマイ。

胃切斷端ノ縫合法トシテ近年行ヒ出シタ仕方ハ確カニ推獎ニ値シマス。ソレハ以前斷片ニ或ハ自覺無シニ行ツタ人モアルカモ知レヌガ、原則的ニ行フコトヲ主張シタ人ハ他一ハ無イ様デアリマス。コレ一ハ片岡茂樹ノ十二指腸斷端ノ處理法ヤ多米時彦

ノ胃粘膜ノ血管分布ノ研究ニ待ツ所が多く、此ノ縫合法ハ胃ニ就テハ今後 Normal-methode ト見做シテモヨイデアラウト考ヘマス。

胃ト空腸トノ吻合術デ後結腸胃後壁ニ行フ際ニ腸間膜創口ヲ如何ニ處理スベキカハ研究ヲ要スル問題デアルガ、目下ハ可及的斜メニ空腸ヲ通過サセルコトニシテ居リマス。コレハハッケルヲ行フ場合デモ胃ヲ大部分切除シタカ或ハ胃ガ萎縮舉上サレテ居ル時ニハ早速問題ニナル筈デアルガ、從來何ノ方面カラモ之ヲ耳ニセヌノハ如何ニモ不思議デアリマス。ツマリ思ヒキリ大部分ノ胃切除ト胃後壁胃腸吻合トヲ行ツテ居ル外科醫ガ稀デアルコトヲ物語ルモノデアリマセウ。

胆道ノ手術ニ際シテ大網造壁術ヲ行フコトハ確カニ一ツノ進歩ト考ヘテヨカラウ。コレモ結局ノ物ヲ言フ迄一ハ多數ノ例症ヲ集メネバナナルマイト思ヒマス。

我が外科教室ノ歩ミ方トシテ最も顯著ナモノハ併シ平壓開胸術ト植物性神經外科トデアリマセウ。

平壓開胸術ハ例數ガマダ多クハ無イガコレヲ以テ正規の手術方法 (Normalmethode 或ハ Methode der Wahl) トシテヨイモノデ、獨逸ノ外科醫ガ今後何程頑張ツテモ何等ノ權威ヲモ値セヌモノト存ジマス。昨年大澤助教授ガ之ヲ以テ余ノ多年ノ理想タリシ平壓開胸開腹術ヲ行ヒ真正ニ胃全剔出術ヲ行ツタコトヤ、辻村長大助教授ガ之ヲ以テ横隔膜ヘルニヤ¹ヲ手術シ得タコトヤ現横田府大教授ガ之ヲ以テ胸腔内孤在包圍性寒性膿瘍ヲ剔出シタコトナドモ凡テ是デアリマス。3歳ノ幼兒ノ心臓ニ刺入シタ針ヲ取り去ツタ(大澤)ノモ此ノ平壓開胸術ノ賜デアル。獨逸カ或ハ歐洲何レカノ國デ之ヲヤリ出シタデアツタナラバ今頃ハ隨分ト材料ガ集ツタデアラウニ惜イモノデアリマス。

植物性神經ノ外科ニ至ツテハ全く伊藤(弘)教授ト大澤助教授トノ努力ニ負フモノデアル。洞腹の腰薦交感神經節切除術デモ腹外的切除術デモ又ハ背部交感神經節切除術デモ凡テ教室ノ歩ミトシテハ確カナ而シテ幅ノ廣イモノデアリマス。今後ハ胃十二指腸乃至ハ肺臟自身ニ向ツテ之ヲ延長スルコトヲモ講ズベキデアリマス。之モ材料ノ少イノハ惜シイコトデス。日本デハ何ヲシテモヤリ甲斐ガ少イデス。

此ノ手術ト大網膜ヲ以テノ充填トヲ合併シテ化膿性ノ骨死腔ノ治癒ヲ企テ得タコトモ新シイ歩ミデアリマス。

死腔ニ關聯シテ述ブベキ事項ハ膿胸手術後ノ死腔ノ治療方針ノ改革デアリマス。即チ無菌性死腔ハ死腔存在ノ儘デ治癒シ得ルコトヲ事實上ニ示シ、其ノ治癒シタル死腔ガ時ト共ニ癰痕性萎縮ニヨリテ肺ヲ膨脹セシメ、終ニハ立派ニ整正治癒 (Restitutio ad integrum) ヲ來シ得ルモノタルコトヲ示シ得タコトデアリマス。此ノ事實デ從來外科總論デ教ヘテ居ル「死腔ニ對スル概念」ガ變更サレネバナラナクナツタト思ヒマス。

此ノ概念ト關聯シテ無菌の手術創ニハ異物タル排液綿紗又ハ排液管ヲ使用セスト言フ方針ニ進ミツツアリマス。之モ新シキ歩ミ方ノ小ナルモノノ一ツデアリマス。

化膿ニ傾キ易キ軟部又ハ骨ノ炎症、化膿ノ虞アル手術部位ノ術前術後ノ處置、術後ノ肺炎等ヲ「コクチゲン」ニヨリテ免疫的ニ處理スルコトハ敎室トシテノ新シキ歩ミ方ノ一ツデアリマスガ、今日デハソレヲサナリト感ゼヌ程ニ一般的ニモ普及シテ居ル様デアリマス。腸窒扶斯菌ニ原因スル骨軟骨炎ヤ癰疽ノ初期等ニ向ツテ今日免疫の療法ヲ棄テテイキナリ觀血性手術ヲ行フ様ナ時代後レノ外科醫ハ殆ンド無イデアリマセウ。

我が外科敎室ハ猪子伊藤兩敎授ニヨリテ創立サレタ當時カラ今日ニ至ルマデ數ヘ來レバ大ナリ小ナリ相當ニ臨床治療ノ上ニ新シキコトラ寄與シテ居ルト信ジマス。

診斷上デハワッセルマン氏微毒反應ノ根本原理ヲ闡明シ、新タニ S R R 反應（單獨補體結合反應）ヲ示シタノモ我が敎室デアリマス。此ノ方法ハ日本ハ無論ノコト歐米何レノ國デモ眞ニ注意ヲ拂ツテ理解シテ居ルラシイ者ハ一人モ無イ様デアリマス。唯ダ僅カニ敎室ニ於ケル直接研究者ダケガ其ノ眞髓ヲ悟入スル位ニ過ギナイデス。併シ眞理ハ衆愚ノ沈黙ニ會ウテ消滅スルモノデハナイ、後年必ズ喚發ノ時ガ來ルモノト信ジマス。

モシ夫レ我が敎室デ敎科書ニ無イ様ナ一種固有ノ診察法ヤ診斷ヘノ誘導法ガ今日デモ猶ホ多少行ハレテ居ルナラバソレハ猪子先生ノ餘風ノ傳ヘラレタモノデアリマス。

猪子先生古稀ノ壽ノ祝賀ノ爲ニ敢テ此ノ一文ヲ草シテ我が敎室創設以來ノ新シキ歩ミ方ノ一般ヲ明カーシテ自覺ヲ新タナラシメ、將來ニ向ツテ更ニ大ニ囑望ヲ繋グハ蓋シ最モ善ク先生ノ御意志ニ叶フモノカト考ヘマス。